

八戸の食：美食地質学で紐解くその魅力

八戸には「いちご煮」や「せんべい汁」を始めとして、唯一無二の素晴らしい食がある。しかしこれらを単に「グルメ」と呼んでしまっただけでは、決して豊かとは言えないこの地で慈しむように食を繋いできた先人たちに申し訳ない。今回は、Buy はちのへ運動の「地元のモノを域外に発信する」という理念のもと、食の優位性によるまちおこしに焦点を当てて、地域特有の地質から生み出された3つの食材について、その成立の背景などを考えてみることにする。

青森県内の縄文遺跡からその骨が見つかることから分かるように、古来よりサバは日本人にとって馴染み深い魚の一つである。しかし近年は乱獲による品質低下のために、ノルウェー産に質・価格ともに押され気味だ。そんな中で「八戸前沖さば」は圧倒的な脂の乗りで異彩を放つ。漁場が太平洋系群マサバの回遊北限付近で低水温であることが原因と言われる。さらに、馬淵川、新井田川、奥入瀬川などの存在が重要な役割を果たしていると考えられる。これらの河川は北上山地や奥羽山脈から窒素やリンなどの「森の栄養分」を海へと運ぶ(図)。そのために八戸沿岸で植物プランクトンが湧き、それが動物プランクトン→小魚・イカ→前沖さばへと連鎖する。つまり、山地の形成が八戸沖の豊かな漁場を育てているのだ。

ではなぜこれらの山々は高くなったのだろうか？その原因は「日本海溝の西進」にある。今から約300万年前、関東地方の地下でフィリピン海プレートと太平洋プレートが衝突し、押し負けた前者は運動方向を北から北西へと大きく変えた。一方で太平洋プレートはどんどん勢力を拡大したために、日本海溝が年間1cmほどの速さで西へと移動し始めたのだ。その結果東北地方の地盤は強烈に圧縮され、階上山などの軽い花崗岩地帯や八甲田・十和田・岩手山などの熱い火山地帯が隆起して、北上山地と奥羽山脈となった。八戸前沖さばは、幾度もこの地を襲ってきた海溝型巨大地震や直下型地震などの大地からの「試練」と引き換えに私たちが手にすることができる「恩恵」と言えよう。

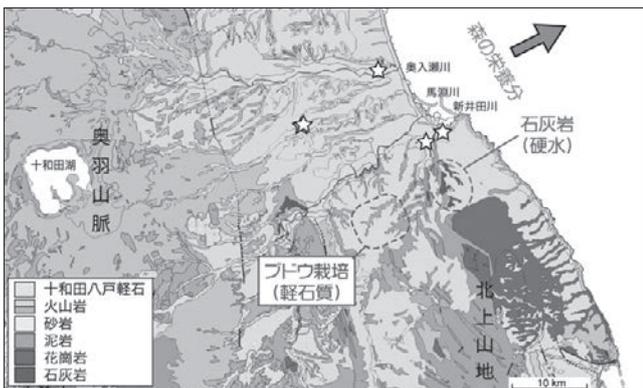
また、八戸は国内屈指の酒処でもある。冷涼な気候

と南部杜氏の弛まぬ研鑽の賜物であろう。さらに八戸銘酒には国内でも稀有な優位性がある。「仕込み水」だ。もともと花崗岩や火山性の山地に源があるこの地の水は鉄分に乏しく、麹菌を健やかに育む。加えて八戸では、八戸キャニオンなどの石灰岩地帯から流れる硬水系と、火山層や砂層を通過してきた軟水が共存する(図：星印が酒造所)。この水の特質が酵母による発酵作用に影響して、濃厚さと芳醇さに多様性を生み出す。同一地域でこれほど味わいの異なる銘酒が醸造されているのには、八戸特有の地質に原因があったのだ。魚介類のみならず、桜肉、シャモロック、短角牛・倉石牛、蕎麦などの特産品とのマリアージュによって、銘酒と食の新たな魅力が引き出されるに違いない。

マリアージュといえば「八戸ワイン」にも触れておきたい。八戸南部には、今から1万5千年前に起きた十和田火山巨大噴火で噴出された軽石の層が広がり(図)、この地域がブドウ栽培地となっている。この土壌がブドウの生育に最も重要な水捌けに優れているのだ。まだ歴史の浅い八戸ワインだが、今後冷涼な気候を逆手にとって、爽やかな酸味のワインやアイスワインなどの展開も期待したい。またワインのテロワールといえば、フランス・ブルゴーニュなどの石灰岩質土壌が有名だ。八戸地方最大の地質学的特徴ともいえる石灰岩を利用した土壌改良も、八戸ワインのさらなる発展を促す可能性があるだろう。

最近では各地で「食」に焦点を当てた魅力発信や振興の取り組みが盛んである。しかしその際によく用いられる「この地方の豊かな自然が、美味しい△△を育くむのです」というフレーズでは、今後確実に増加するであろう「エデュケイティド・トラベラー」の心には響かない。さらに、地域振興には不可欠の「シビック・プライド」をきちんと醸成するためにも、食と自然とのオンリーワンの関係性を深く理解することが重要であろう。ある地域に特徴的な食を育んだ地質学的な背景と、その食を育ててきた人々の営みを紐解く「美食地質学」が、Buy はちのへ運動の一助になれば幸甚である。

【寄稿者】 巽 好幸 氏



プロフィール

1954年大阪生まれで、「美食地質学」の創始者。日本地質学会賞、日本火山学会賞、米国地球物理学連合ボーエン賞、井植文化賞などを受賞。著者に「和食はなぜ美味しい 日本列島の贈り物」「なぜ地球だけに陸と海があるのか」などがある。NHKスペシャル「ジオ・ジャパン」シリーズ、毎日放送(MBS)「情熱大陸」など出演・監修、多数。

2021年ジオリブ研究所を設立し、現在、同研究所の所長を務める。京都大学総合人間学部教授、同大学院理学研究科教授、東京大学海洋研究所教授、海洋研究開発機構プログラムディレクター、神戸大学海洋底探査センター教授、同大学高等研究院アライアンス長などを歴任。現在神戸大学の客員教授も務める。